上顎洞慢性副鼻腔炎根治手術の臨床統計

飯島 直也・石山 哲也・田口喜一郎

Radical Surgery for Chronic Maxillary Sinusitis

Naoya Iijima, Tetsuya Ishiyama and Kiichiro Taguchi

(Shinshu University School of Medicine)

We investigated 108 cases of radical surgery for chronic maxillary sinusitis from 1989 to 1997. The number of cases, sex, age, chief complaint, and clinical history were reviewed.

On average 12 cases of the operation was performed in a year. The male to female ratio was about 3:2. The most important chief complaints were nasal obstruction and nasal discharge. The average suffering period was about 5 years, while 27% of the patients suffered for over 10 years. Our policy is to perform radical surgery only on patients suffering from sinusitis who were junior high school age (12 years old) and older.

Key words : radical operation, chronic maxillary sinusitis

はじめに

食生活ならびに公衆衛生の向上および、主にマクロライド系抗生物質使用法の発達により、慢性副鼻腔炎症例の減少、軽症化がいわれているが、耳鼻咽喉科領域ではいまだに最も多い慢性炎症疾患の一つで手術症例も少なくない。

今回、当院耳鼻咽喉科において平成年間(9年間)に上顎洞根本術を行った108例に臨床的検討を行い若干の文献的考察を試みたのでその大要を報告する。

対 象

平成元年から平成9年までの9年間に信州大学耳鼻咽喉科にて上顎洞根本術を行った108例である(図1)。年齢分布は12~72歳であり、男性68人(12~72歳、平均43歳)女性40人(13~72歳、平均40歳)で全体として、平均年齢は42歳であった。なお上顎洞悪性腫瘍に対する手術症例は除外した。

調整事項は、年度別手術数、副鼻腔真菌症例、初発症状からの期間、主訴の分類、18歳以下の症例につき検討を加えた。

結 果

1. 年度別症例数

平成元年度は24例と多いが、おおむね10例前後手術を行っている。平均12例である。図2に示す。

2. 慢性副鼻腔炎以外の症例

上顎洞真菌症が3例存在した。表1に示す。平成元、3、7年において各1例ずつ施行された(表1)。

3. 症状発現時より手術までの期間

症状発現時点より手術時までの期間を調査し得た症例は75人でその結果を図3に示す。平均は5.4年で、10年以上要しているものも(31%)存在した(図3)。

4. 主訴の分類

主訴の明らかな83例において、複数の訴えを示すものはそれぞれの項目別に算出した。鼻閉55例(66%)、鼻汁31例(37%)、無臭症6例(7%)、頭痛4例(5%)であった(図4)。

5. 中高生における根治手術症例

平均罹患期間は5年、鼻閉は全例に認められた(表2)。

図1 性別および年齢分布

図2 年度別治療頻度

図3 病悩期間

表 1 上顎洞真菌症症例

年齢(歳)	性 別	罹患期間(年)	主 訴
52	女 性	0.5	不 明
54	女 性	5	鼻 閉
48	女 性	不 明	鼻出血

考 察

今回検討した慢性副鼻腔炎108例の手術症例については年齢分布は12～72歳に及んだ。男性では壮年以降の手術症例が、女性では10代、50代に多く手術を行っていた。男女比は約3対2で男性に多かった。女性で20、30代に減少しているのは出産育児などの社会的影響があるものと考えられる。適切な手術年齢を考慮する際には上顎洞手術によって引き起こされる顔貌を構成する上顎骨の変化を十分考慮に入れなければならない。長船¹⁾は小児慢性副鼻腔炎手術の追跡調査を行い、非手術側に比べてX線上骨発達異常をみたとしている。高橋²⁾は小児慢性副鼻腔炎では自然治癒の可能性があるが、かつ上顎洞は10代後半で完成するので、手術はそれ以降がよいとしている。当科としても上顎洞の発達段階での手術はできるだけ、できれば高校生になってから手術を行うのが適当と考えている。

表 2 中高生においての根治手術症例

手術時年齢	罹患期間(年)	鼻閉	鼻汁	その他の症状
男 性				
12	3	あり		
13	10	あり		
15	1	あり	あり	
15	2	あり		
16	10	あり		
16	1	あり		
17	1	あり	あり	
女 性				
13	6	あり		嗅覚障害
14	4	あり		
14	10	あり	あり	
16	5	あり		頭 痛
16	10	あり		嗅覚障害
17	5	あり		
18	10	あり		嗅覚障害
18	3	あり		

3例の上顎真菌症にたいしても根本手術が行われている。

図 4 症状の分類

総数83例。

複数の主訴を有すものはそれぞれの項目を別々に集計した。

病悩期間については平均5年と比較的長い例が多かった。10年以上、なかには30年以上という症例も数例あった。仕事家事が一段落したところ受診し手術となったものと考え、多くは数年間保存的に治療したが症状がとれなかったあとの手術が多いと思われた。

手術前の自覚症状の主なものは鼻閉、鼻汁であった。金田ら³⁾の報告では、篩骨洞病変も含まれているので厳密な比較はできないが鼻閉(91%)、鼻漏(68%)、後鼻漏(43%)、嗅覚障害(43%)、頭重感(23%)であった。

学童期の手術の検討では、最少年齢12歳であったが、この児は、16カ月の間に3回鼻茸摘出術を受けたが再発してきた難治例であった。

今回の検討には鼻茸切除術のみ行った症例は含まれていないが、症状緩和のためには選択肢の一つとなりうる⁴⁾。

ま と め

①過去9年間の上顎洞根本手術をうけた108例を報告した。

②男性68例、女性40例、平均年齢42歳であった。

③主訴は鼻閉が約3分の2の症例にあり、鼻汁、嗅覚障害、頭痛が続いた。

④病悩期間は平均5年で、10年以上の症例も23例存在した。

⑤学童期の手術につき検討した。

参考文献

- 1) 長船宏隆：小児副鼻腔手術の追跡調査。耳展 17：75～81, 1974.
- 2) 高橋 良：慢性副鼻腔炎の自然的変動とくにその不安定的について。耳展 9：367～381, 1996.
- 3) 金田宏和、鶴田至宏、田中 治、他：慢性副鼻腔炎根治術施行例の臨床統計。耳鼻臨床 補37：114～120, 1990.
- 4) 梶 博幸、西川和明、喜多村健、他：当科における鼻副鼻腔手術の臨床統計。耳鼻臨床 補59：35～42, 1992.

別刷請求先：飯島直也
〒390-8621 長野県松本市旭3-1-1
信州大学医学部耳鼻咽喉科学教室